

「かまど詞大概」の語彙  
——「諸人片言なをし」等との比較を通して——

長崎靖子\*

A Study on Lexicons of “Kamadokotobataigai”

Yasuko NAGASAKI

要 旨

本稿では、式亭三馬著『小野篁諺字尽』（文化3年）所収「かまど詞大概」の片言語彙を、江戸時代の他の片言資料の語彙と比較し、「かまど詞大概」の語彙の性質について考察した。「かまど詞大概」に記されている片言語彙52語を、江戸時代の七種の片言資料の語彙と照らし合わせたところ、共通する24語が見つかった。これら七種の片言資料は、いずれも京都の版元から刊行されているところから、この24語は京の町でも聞かれる片言であったといえる。これにより、三馬の「かまど詞大概」の片言語彙の中には、江戸の町特有の片言だけではない語が含まれていることがわかる。その一方で、「かまど詞大概」の語彙を東京の俗語集とされる、大槻文彦の『東京須覧具』（明治23年～）の語彙と比較したところ、七種の片言資料には見られない9種の共通の語が得られた。これらの語は、連母音の音訛、促音の挿入、拗音の直音化など、江戸訛の特徴が顕著である。

このように「かまど詞大概」には、江戸特有の地域性のある片言と、地域に関わらない片言が見られる。三馬は『四十八癖』（文化14年）の中で、当時の江戸の町を「たいとくわい大都會は、しよこく諸国の人あつま會るゆゑに、よしう六十余州の方言ほうげんつう通ぜずといふことなく、みい耳に馴れ、な口にくち従つて、つね常にくにへ諸州の言ことば語をかひ混ぜず、こん」と記述している。当時の江戸の町は、様々な人が出入りする地域であったため、地域の特徴を越えた片言は、人の出入りにより、他地域から伝えられた可能性が高い。「かまど詞大概」の語彙調査を通して、『四十八癖』の記述がより実証的に裏付けられたといえよう。

キーワード：「かまど詞大概」, 「諸人片言なをし」, 『浮世鏡』, 『片言』, 『東京須覧具』

\*教授 日本語学

## 1. 本稿のねらい

式亭三馬著『小野篁謔字尽』（文化3年 1806）は、江戸時代初期より漢字学習の教養書として流布していた『小野篁歌字尽』をもじった書である。この中に「かまど詞大概」という一群の語彙が見られる。前書きには、「おかしくはおかまのまへの八介どの長松とひとつになつてかたこと（以下下線は筆者による）だらけの高ばなしこれは大和詞のこぢつけながら」とある。これにより「かまど詞」は「大和詞」の洒落として名付られたこと、そしてその内容が当時の片言<sup>(1)</sup>を記したものであることが知られる。この「かまど詞大概」に関しては、鈴木真喜男（1974）で、次のように述べられている。

「かまど詞大概」は、大万室にもみられる「諸人片言なをし」などの類である。「片言なをし」は、安原貞室の『片言』の末書であり、「当世大和言葉」などともよばれ、重宝記の類にもおさめられている。「けたいな詞つきじやなア。お慮外も、おりよげへ。観音様も、かんのんさま。なんのこつちやろな。」のように、「かみがたすじの女」に江戸言葉をけなさせている、有名な条とみあわすと興味深いものがある。

P.435

本稿ではこの鈴木（1974）の指摘をもとに、「かまど詞大概」の片言語彙を、江戸時代の「諸人片言なをし」をはじめとする他の片言資料の語彙と比較し、「かまど詞大概」の語彙の性格を考察する。まず「諸人片言なをし」を中心に、「諸人片言なをし」が依拠したとされる『浮世鏡』巻第三（貞享5年 1688）、さらに安原貞室の『片言』（慶安3年 1650）の語彙との比較を試みる。

## 2. 「諸人片言なをし」関連の書に関して

調査の前に、「諸人片言なをし」と『浮世鏡』・『片言』との関係について述べておく。木村晟（2008）では「諸人片言なをし」に関し、

『女節用集』の頭書の第四項は「諸人片言なをし」として置く語群にて、影印本文（113～114頁）は本書の巻末に付載した「翻字本文」である。この語群は貞享五年（一六八八）刊の『浮世鏡』第三「片言補遺」の人倫之部に悉く依拠してゐることが、吾人の今般の調査にて判明した。

P.214

と述べている。上記の文で『女節用集』とあるのは、『女節用集文字囊』（宝暦12 1762年版）

のことである。さらに木村は

斯く『女節用集』の「諸人片言なをし」の前半一〇四語が『浮世鏡』第三（意義分類体辞書）を原拠にしてゐる事実を確認し得た。後半（本書120～124頁）は『浮世鏡』第三に存せぬものである。処で『浮世鏡』は現在吾人が参看し得るのは『日本古典全集』第四期所収本（一九三一刊）で、「卷第三」のみの零本である。『女節用集』の「片言直し」後半部に該当するのは、おそらく「卷第四」に「雑詞之部」の如き部類名が存したのではないかと推定する。

P.221～222

とする。『浮世鏡』は、現在のところ活字本として公刊されているのは「卷第三」のみであり、その他の巻の所在は明らかではない。このため、木村が述べているように「諸人片言なをし」の全ての語が『浮世鏡』に依拠したものであるかどうかという検証はできないが、前半部が「悉く依拠している」とすれば、木村の推測するように後半部分も『浮世鏡』に依る可能性は高い<sup>(2)</sup>。

「諸人片言なをし」は、『女節用集文字囊』の他、先に示した鈴木（1974）や太平主人編『小野篁諺字尽』（1993）の中で紹介されている「大万宝節用集字海大成」（元文3（1739）年）<sup>(3)</sup>の頭書にも見られる。鈴木（1974）で示された「諸人片言なをし」は、『万世国宝文翰要領文会節用集大成』（鈴木架蔵本 元文3（1739）年 作者 伊丹屋新兵衛）所収のものであるが、本稿では、北海道大学図書館所蔵の『萬寶字海大成（大萬寶字林大成）』<sup>(4)</sup>所収の「諸人片言なをし」を資料とする。本資料を選んだのは、鈴木の架蔵本と同じく元文3年の版で、作者も同じ伊丹屋新兵衛とされるところからである。なお参考として、前述した『女節用集文字囊』所収の「諸人片言なをし」も使用する<sup>(5)</sup>。『萬寶字海大成（大萬寶字林大成）』の「諸人片言なをし」は、『女節用集文字囊』の「諸人片言なをし」と比較すると省かれている語が多いが、「かまと詞大概」の語彙に関わる部分に省略はない。省略された語を除くと、『萬寶字海大成（大萬寶字林大成）』の「諸人片言なをし」は、『女節用集文字囊』の「諸人片言なをし」と、濁点の有無などの細かい点を除けば<sup>(6)</sup>語は同一である。故に『萬寶字海大成（大萬寶字林大成）』の「諸人片言なをし」も、『女節用集文字囊』のそれと同様、『浮世鏡』巻第三に依拠したものと考えられる。

『浮世鏡』には、巻第三の序に「片言補遺」として編纂の趣旨が書かれている。

此巻より下は詞のあやまれるをしるし侍る也。これより先に俳諧師貞室が片言の書五冊をあみて世におこなひぬ。これにもらしたるをかき侍れば更にひとつ事にあらず。此故に是にもれたるは彼書にありと知給ふべし

この序文から、『浮世鏡』巻第三は安原貞室の『片言』を範とし、これを補充する意図で編ま

れたことがわかる。

その安原貞室の『片言』には、編纂の趣旨として

さたすき侍るころ独りの子もたりもとより家まつしければおおしたてぬるさまもはつかし  
のもりめのとさへおさへ侍らてみつよついつ、むつあふ友達かたらひにもいとつたなき  
かたことをのみ云侍る侘しけれとひとつへいひしらせんもかきりしなればそゝろに這  
一帖に記してかれにとらす

とあり、貞室の子の片言矯正のために編まれたとする。本稿では、「諸人片言なをし」関連の書として『浮世鏡』と『片言』の語彙も調査し、「かまど詞大概」の語彙と比較する。資料としては『近世方言辞書集成《第一巻》片言 浮世鏡』（1998）を用い、参考として白木進編著『かたこと』（1976）、白木進・岡野信子編著『「かたこと」考』（1979）を使用する。

### 3. 「かまど詞大概」と「諸人片言なをし」の語彙

#### 3-1 『浮世鏡』の序文と三馬著『狂言田舎操』『四十八癖』の記述

「かまど詞大概」の語彙は、三馬が江戸居住者の使用する片言を記したものであろう。一方「諸人片言なをし」が『浮世鏡』の影響を受けているとすれば、都に居住する人を中心とした片言を記したものと考えられ、両資料が対象とする地域は異なる。また、「かまど詞大概」が記されている『小野篁諺字尽』は19世紀初頭、『浮世鏡』が17世紀後半の成立であり、これに依拠したとされる「諸人片言なをし」は、管見した資料では<sup>(7)</sup>18世紀前半から中頃のものしか見られない。従って三馬の「かまど詞大概」との間には、年代的な差も大きく、現時点では「諸人片言なをし」と「かまど詞大概」の間に直接的な関係があったとは言い難い。但し、注4に示したように「大萬寶節用集字海大成」は文化11年にも刊行されており、三馬の時代にも手に入る節用集ではなかったかと思われる。とすれば、三馬は、「かまど詞大概」を作る際に「大萬寶節用集字海大成」所収の「諸人片言なをし」を見ていた可能性も考えられる。

また、三馬の『狂言田舎操』（文化8年 1811）、『四十八癖』（文化14年 1817）の記述の中には、「諸人片言なをし」が依拠したとされる『浮世鏡』の序文との間に、次のような類似点が観察できる。『浮世鏡』の序文には、

都に住人の片言お、きはいか成事ぞや。答て云。尤所は無上の花洛なれども上が上成はいたりて高く、中品より下なるがお、くすむ所なれば、片言はみなこれがいふ事也。それをあやまりもてあがり、中品より上さまの人もあやまり国風となれる也と云々。先都の誤りをいふにて、夷中は自然ときこえ侍るべし。心をつけて嗜むべき事にこそ。

とある。下線部の内容は、片言は、京の下層の住人が使用するものであるが、それが上層にも伝染し、誤った言葉遣いが広がる、というものである。

一方、三馬の『狂言田舎操』には、次のような記述が見られる。

ハテ江戸訛えどなまりといふけれど。おいらが詞ことばは下司下郎げすげらうで。ぐつと鄙いやしいのだ。正銘しやうめいの江戸言ことばといふは。江戸でうまれたお歴れきへのつかふのが本江戸ほんさ。これは又ほんの事ことだが。何いづれの國くにでも及きやうばねへことだ。然様きやうしからば然者いかが。如何いかにいたして此様かやう仕つかまつりましてござる。など、いふ所は。しやんとして立派りつぱで。はでやかで實げにも吾嬬男あづまをとこはづかしくねへの。京女郎きやうぢやうらうと對句たいごになる筈はずさ。ちつとお談儀だんぎが長くなるが。江戸は繁はん花くわの地ちで。諸國しよこくの人の會あつまる所ところだから。國くにへの言ことばが皆馴みなな聞きて通つうじるに順したがつて。諸國しよこくの言ことばが江戸者うつに移うつらうぢやアあるめへか。そこでソレ。正眞しやうしんの江戸言ことばは。孰どれが夫そだやら混雜めつたくさに爲なつたといふものさ。それでもお歴れきへにはないことだ。皆江戸訛なまりといふけれど。訛なまるのは下司下郎げすげらうばかりよ。

人形遣いのでく蔵が、上方出身の浄瑠璃語り、旅籠太夫に「そりやアさうと。やす休むべいちやアねへか」と「江戸訛」を真似されたことに腹を立て、江戸の言葉について語った場面で、江戸で生まれたお歴々には江戸訛はなく、訛るのは下司下郎である、と述べている。この記述は『浮世鏡』のなかで、「中品より下なるがおくすむ所なれば、片言はみなこれがいふ事也」とする部分に通じる内容である。また、『四十八癖』三編<sup>(8)</sup>には、

○世よに關東くわんと訛なまりと呼よび来れども。關東くわんとの人ひと。おのへにあらず。其証そのしるしは高貴かうきの人ひとを見よ。言語ことばづかひ殊ことに正ただしく。音声こゑ勝まさけて清きよく。他邦たほうの人の及およぶ所ところにあらず。下賤げせんの人ひとにおいては省語はぶきことば約言つめことば多くして。音こゑもおのづから濁だみたり。且大都會かつたいとくわいは。諸國しよこくの會あつまるゆゑに。六十余州ちゅうじゅうの方言ほうげん通つうぜずといふことなく。耳みみに馴なれ。口くちに従したがつて。常つねに諸州しよしゅうの言語ことばづかひを混こんぜず。(中略)真まことの江戸産うまれといふもの世よに稀まれなり。真まことの江戸産うまれといふは国初こくしよ以来いらい江戸に住給すだひて数代すだい連綿れんめんと相統あひたつし給たまう高貴かうきの人ひとならではなし。さるゆゑに。貴族きぞくの言語げんご清音せいおんにしていささかも訛なまりらず。世よに江戸訛なまりといふもの下賤げせんに限かぎることここをもつてしるべし。且江戸訛なまりをしらざる他邦たほうの人々ひとには此書このしよの言語げんご解げし難がたからんことをおもひて。こゝに其一そのいち二にを挙あぐ。此他このほかは江戸訛なまりにあらず。諸國しよこくの方言ほうげん傳染でんせんしたるものとしるべし。

という記述が見られる。「世に江戸訛といふもの下賤に限ることここをもつてしるべし」という文は、『狂言田舎操』の「皆江戸訛といふけれど。訛るのは下司下郎ばかりよ」という言葉と通じ、『浮世鏡』の「中品より下なるがおくすむ所なれば、片言はみなこれがいふ事也」という記述にも合致する。また、『四十八癖』には、「大都會は、諸國の會るゆゑに。六十余州の方言通ぜずといふことなく。耳に馴れ。口に従つて。常に諸州の言語を混ぜず。」と、江戸に流入する他国からの人の言葉が、江戸の言葉に影響を与えている様子が記述されてい

る。これは、『浮世鏡』の「それをあやまりもてあがり、中品より上さまの人もあやまり国風となれる也と云々」に通じる部分である。

三馬の江戸語観としては、先の『狂言田舎操』の「でく蔵」の言葉がよく引用されるが、土屋信一（1982）では、この『四十八癖』の記述に対し、

「でく蔵」の言葉から、我々は、当時の江戸に鄙しい江戸訛と、お歴々の使う訛りのない言葉とがあったと想像したわけだが、「四十八癖」の一文から、それが一層確実なものになったと言える。

P.81

と述べ、『狂言田舎操』の記述を裏付ける資料であるとする。

『浮世鏡』が成立した時代の京の町も、三馬の時代の江戸の町も、当時の日本の中心となる大都会であり、人の出入りの激しい場所である。そのような地域では、様々な言葉の影響を受けやすく、新たな表現も生まれやすい。『浮世鏡』の中で、「中品より下なるがおゝくすむ所」という部分の「下」の層は、出入りの激しい層であったと思われる。京の町、江戸の町は、そのような他地域からの言葉の侵入により、様々な言葉が混在する地域であった。三馬の著作には、当時の江戸の町で聞かれる様々な言葉遣いを、面白おかしく書き留めたものが多いが、「かまど詞大概」に見る片言もその一つとして捉えられよう。『浮世鏡』の序文が、三馬の『狂言田舎操』『四十八癖』の記述に影響を与えたという可能性は低いが、三馬の江戸語観は、『浮世鏡』に記された京の町言葉と通じる部分があり、都会の言語事情を反映した記述といえよう。

以上のような、「都会に混在する片言」という共通点を踏まえ、これから「かまど詞大概」と「諸人片言なをし」『浮世鏡』『片言』の語彙を比較する。尚、語の順番は「かまど詞大概」の語順に従って記述する。

### 3-2 「かまど詞大概」と「諸人片言なをし」『浮世鏡』『片言』の語彙の比較

まず、「かまど詞大概」と「諸人片言なをし」の語彙を比較する。両資料の中で共通するのは、以下の九つの語である（「かまど詞大概」の略は「カ」、「諸人片言なをし」の略は「諸」とする）。

#### 「かまど詞」

- ・なんてん南天はなるてん
- ・鳶はとんび
- ・さみせんをしやむせん
- ・ゆふべ夕をよんべ
- ・あんどろはあんどん

#### 「諸人片言なをし」

- ・なつてんは 南天 なんてん
- ・とんびは 鳶（とび）なり
- ・しやみせんは 三味線 さみせん
- ・よんべは 夕部 ゆふべ
- ・あんどんは 行灯 あんどろ

「かまと詞大概」の語彙

- ・ゐろりはゆるり
- ・わかしゆ若衆はわかし
- ・おほかみたぬき狼 狸はおゝかめ<sup>(9)</sup> たのき
- ・ゆるりは 囲炉裏 いろり
- ・わかしうは (わかしゆ) なり
- ・たのきは 狸 (たぬき) なり
- ・おほかめは 狼 (おほかみ) なり

「なるてん「カ」「なつてん「諸」, 「しやむせん「カ」「しやみせん「諸」」「わかし「カ」」「わかしう「諸」」のように、両資料で片言の記述が異なる語も見られるが、これは地域差、時代差による発音の違いであろう。これらの語を『浮世鏡』の記述と比較すると次のようになる(『浮世鏡』の略は「浮」とする)。

- ・なつてん 南天 (なんてん)
- ・とんび 鳶 (とび)
- ・しやみせん 三線 (さみせん, 三味線は俗字也)
- ・よんべ 夕 (ゆふべ)
- ・あんど (あんど) 行燈 (あんどん)
- ・ゆるり 圍爐裏 (いろり)
- ・わかし わかしゆ 若衆也
- ・おほかめ 狼 (おつかみ)
- ・たのき 狸 (たぬき)

「諸」と「浮」は、片言の記述とほぼ同じであるが、下線部の「あんど」に関しては、「浮」では「あんど (あんど)」が片言に記されており、「諸」と逆になっている<sup>(10)</sup>。さらに「浮」には、新たに「カ」に共通する語として、下記のものがあった。

- ・きり物 きもの 衣 服同「浮」
- ・くはんをん めうり 観音 くはんのん 如意輪 観音也
- ・観音もくはんのんと唱がよし「浮」
- ・きによう 昨日 (きのふ)「浮」
- ・きもの 着物はきりもの「カ」
- ・くはんおんハかんのん「カ」
- ・きのふ 昨日をきんにやう「カ」

「浮」では下線部「くはんのん」と連声の発音が良いとされているところが、「カ」の基準の語と異なる。「浮」の「きによう」という記述も「きんにやう」と異なるが、「きによう」はあ

るいは「きんによう」と読んでいたかもしれない。

次に「かまど詞大概」を安原貞室の『片言』と比較する（『片言』の略は「片」とする）。『浮世鏡』は『片言』の補遺として編まれたとされるが、内容を見るとかなり語の重複が見られる。白木・岡野（1979）では、『浮世鏡』と『片言』の語彙で「重複、もしくは類似するもの97項、その数は実に全310条の三分の一近くに達する」とする。その中には『浮世鏡』に見られる「かまど詞大概」の語彙も含まれている。「諸人片言なをし」『浮世鏡』と共通する「かまど詞大概」の語彙は、次のものである。

- 一 鳶 ○とんび
- 一 外家の衣類を ○きものといふべきを。きりものといふこと然るべからず。きる物とはいふべき歟
- 一 観音堂 毗沙門堂などを ○くはんのど ○びしやもんど
- 一 きのを ○きんのう ○きによ
- 一 行燈を ○あんど。二字ともに唐韻あるがゆへに ○あんどんよしと云り
- 一 囲炉裏を ○ゆるりはわろし。又いるりとはいふべし。假名遣ひの書にいろりとあり
- 一 狼を ○おほかめ
- 一 狸を ○たのき

下線部の「あんど」に関しては、「浮」同様「片」でも「あんどん」がよしとし、その理由として「二字ともに唐韻であるがゆへに」と記している。この他「片」には、「諸」「浮」には見られない、新たな「カ」の語も見られる。「カ」の語と並べて比較する。

- 一 櫻欄を ○しよろ ○するとは哥にもよめり「片」
  - ・しゆる箒はしろぼうき「カ」
- 一 手裏剣を ○しりけん「片」
  - ・手裏釵はしりけん「カ」
- 一 雪駄を ○せきだといふはわろしといへど。くるしかるまじき歟。
  - せちだ。せつたなどいふは耳に立てあし。 (略)「片」
  - ・雪踏をせきだ「カ」
- 一 迷ひ子を ○まへ子「片」
  - ・まよひ子はまいご「カ」



#### 「かまど詞大概」の語彙

- 一 草履ざうりを ○じやうりはいやしきといふ人あれども少もくるしからず。金剛こんこうといふもよし。(略)「カ」  
・草履ざうりはぜうり「カ」  
一 福祿壽ふくろくじゆを ○ほくろくじ「カ」  
・福祿壽はほくろくじん「カ」  
一 夷えびすを ○えべす「カ」  
・夷えびすはゑべす「カ」

上記の語を比較すると、「棕櫚」「雪踏」「福祿壽」「夷」の他は、片言の記述が異なっている。先に述べたように地域差、時代差による発音の違いと思われる。

#### 4. 「かまど詞大概」とその他の片言資料の語彙

これまでの調査で、「かまど詞大概」の中の19語が「諸人片言なをし」『浮世鏡』『片言』から採取された。19語の中には片言の記述が異なるものが見られ、これは京都と江戸という地域、また時代の違いから起こる発音の差と推測される。

次に「諸人片言なをし」『浮世鏡』『片言』の他、節用集、重宝記、往来物の類<sup>(11)</sup>から見つけた片言資料と「かまど詞大概」を比較する。資料は以下の通りである。『男重宝記』(元禄5(1693)年)所収の「片言なをし」(略は「男片」とする)、『ゑ入り世話重宝記』元禄8(1699)所収「世話のかたこと」(略は「世片」とする)<sup>(12)</sup>、『七ツいろは』(正徳3(1713)年)所収「片言直し」(略は「七片」とする)、『文章指南重宝記』(安永10(1781)年版)所収の「片言教かたことけう訓文章くんぶんしやう」(略は「片教」とする)<sup>(13)</sup>。

##### 4-1 「かまど詞大概」と『男重宝記』所収「片言なをし」

『男重宝記』(元禄5(1693)年)は、当時の男性としての心得を記した実用書で、元禄5年版の他諸本が見られる。「男片」からは「カ」所収の語が8語見られた。

- 一、ろれつがまわらぬは呂律なり「男片」  
・呂律わからぬはろれつがまはらぬ「カ」  
一、あんどんは行燈なり「男片」  
一、なつてんは南天なり「男片」

- 一、よんべは夕部なり「男片」
- 一、ゆるりは、囲炉裏なり「男片」
- 一、おほかめけつねは、狼狐なり「男片」
- 一、たのきは、狸なり「男片」
- 一、うんてん万里は、雲泥万里なり「男片」
- ・雲泥万里をうんてんばんてん「カ」

この中で、「諸」「浮」「片」に見られなかった語は、下線部の「呂律」と「雲泥万里」である（「男片」にはルビがふられていないため、正確な読みはわからない）。

#### 4-2 「かまど詞大概」と『糸入世話重宝記』所収「世話のかた言」

『糸入世話重宝記』は、俗間の故事や諺、俗語を「いろは」順に書きとめたもので、片言は「世話のかたこと」として、「いろは」のそれぞれの末に記されている。「カ」との共通の片言は12語あった。

- 一 鷹とびヲ とんび
- 一 着物きものヲ きり物
- 一 手裏釵しゅりけんヲ しりけん
- 一 雲泥うんでいばんり万里ヲうんてんばんりといういわく雲は天の泥は地なり天地の間数万里をへだてたる事なり
- 一 雪駄せちだをせきだといふはあしく又せつたといふも耳にたつてあしく雪駄せちだといふことのむかしはなし（略）
- 一 ききのふヲ きんのう きによ
- 一 迷まよひ子こヲ まへ子
- 一 草履ぞうりヲじやうりといふわろし（略）
- 一 圍爐裏いろりヲ ゆるり
- 一 狼おほかめヲ おほかめ
- 一 狸たぬきヲ たのき
- 一 夷あびすヲ 糸べす

「世片」の中には、新たに「カ」と共通する片言は見られない。但し「雪駄（せちだ）」を正

とする部分は、他の片言資料との相違点である。

4-3 「かまど詞大概」と『七ツいろは』所収「<sup>かたことなをし</sup>片言直」

『七ツいろは』の「片言直」は、最初に片言が記され、その横に漢字と正しい読み方がルビで記されている。「カ」に共通する語は次の通りである。

ゆるりは圍爐裏（いろり也）	あんどんは行燈（あんどう也）
まへごは迷子（まよひご也）	よんべは夕部（ゆふべ也）
えべすは夷（えびす也）	しりけんは手裏釵（しゆりけん也）
うんでんばんりは雲泥万里（うんでいばんり也）	

「七片」の中にも、新たに「カ」と共通する語はない。

4-4 「かまど詞大概」と『文章指南重宝記』所収「<sup>かたことけうくんぶんしやう</sup>片言教訓文章」

『文章指南重宝記』に関しては、長友千代治（2005）で「往来物風の体裁を取りながら、文字尽し、読み方を教示する面もある」とし、その巻之一「<sup>かたことけうくんぶんしやう</sup>片言教訓文章」を

書簡で、重言、片言について正しい読み方を伝えると言うものである。書簡形式を取ったことで、手紙の書き方の教示にもなる。その重言、片言は二百八十五語があがっている。

P.125

と説明している。「片教」は、右ルビに誤った読みを平仮名で示し、左ルビに正しい読みを片仮名で示している。本稿では（ ）の中に左ルビ（正しい読み）を示す。この中で「カ」に含まれる語は次の通りである。

<sup>まへご</sup> 迷子（マヨヒゴ）	<sup>しりけん</sup> 手裏釵（シユリケン）	<sup>ちやうり</sup> 草履（ザウリ）	<sup>よんべ</sup> 夕部（ユウベ）
<sup>ぜぬ</sup> 錢（ゼン）	<sup>いろり</sup> 圍爐裏（イロリ）	<sup>なつてん</sup> 南天（ナンテン）	<sup>ちやまが</sup> 茶釜（チャガマ）
<sup>しやく</sup> 柄杓（ひしやく）	※右ルビはししやくか？		<sup>を、かめ</sup> 狼（ヲ、カミ）
<sup>しやみせん</sup> 三味線（サミセン）	<sup>けつねたのき</sup> 狐狸（キツネタヌキ）	<sup>とんび</sup> 鳶（トビ）	<sup>えべす</sup> 恵美須（エビス）

この中で、「片教」にのみ見られた「カ」の語は、下線部の「錢」「茶釜」とである。「カ」には次のように記述されている。

・ <sup>ぜに</sup> 錢はぜね「カ」	・ <sup>ちやまが</sup> 茶釜はちやまが「カ」
-------------------------	------------------------------

以上の片言資料の調査により「かまど詞」の52語中24語が、江戸時代の他の片言資料にも見られることが示された。但し、片言の記述が異なる語も見られる。

### 5. 「かまど詞大概」と『東京須覧具』の語彙

これまで調査した資料は、江戸の前期から中期に作られた片言資料である。三馬の時代に最も近い『文章指南重宝記』も安永10年(1781)の版で『小野憲謙字尽』(文化3年 1806)と同時期とは言い難い。また、これらの片言資料は、いずれも京都が版元であり、各資料に見られる片言は、京の町で聞かれる片言ということになる。江戸を版元とし、江戸で聞かれる片言を扱った資料と比較する必要があるが、今回の調査では、江戸を版元とした三馬と時代の近い資料は、見つけることができなかった。そこで、「かまど詞大概」の中で、江戸の片言を特徴づける語を知る術として、時代は大分下るが、東京の俗語集とされる大槻文彦の『東京須覧具』(明治23年～)の語彙との比較を行うことにする。『東京須覧具』は田鍋桂子(2002)の調査によると、その見出し語総数1886語、「話しことばを広く集めたもの」であり、さらに「特に形が崩れた語や、特殊な集団で秘密保持のために使用される「隠語」もその中に含み、「いやしい」という語感が多少なりとも伴う語を指していると考えられる」とする。『東京須覧具』の語彙すべてが片言ということにはならないが、その中にはおそらく江戸特有の片言が含まれていることと思われる。

「かまど詞大概」と『東京須覧具』(「須」と略す)に共通する語は次の通りである。下線部は調査した七種の片言資料には見られない語である。これらの語は「カ」も共に記す。

・てんぢよく(名) 天「須」	・ <sup>てん</sup> 天はてんぢよく「カ」
・ちびた(名) 地「須」	・ <sup>ち</sup> 地はちびた「カ」
・べーべ(名)(小児)「須」	・ <sup>べに</sup> 紅粉はべね「カ」
・かんのんさま 観音様「須」	
・おっこちる 落ちる「須」	・ <sup>おち</sup> 落ることをおっこちる「カ」
・ぜにっこ「須」	
・ぎしゃく 磁石「須」	・ <sup>じしゃく</sup> 磁石はぎしゃく「カ」
・おでん(名) こんにやくノ煮込「須」	・でんがくはれんがく又おでん「カ」
・たいない 丁寧「須」	・ <sup>こていぬい</sup> 御丁寧はごたいない「カ」
・へえけえ(名) 俳諧「須」	・ <sup>はいかい</sup> 俳諧はへへけへ「カ」

## 「かまど詞大概」の語彙

- ・しばや 芝居「須」
- ・ちゃまが 茶釜ノ倒訛「須」
- ・たのき 狸「須」
- ・えべす 蛭子「須」
- ・芝居はしばや「カ」

「須」の中で新たに「カ」と共通する語は9語見られる。但し、上記の語の中で、「須」の「ペーベ」は子供の言葉と注があり、「カ」の「ペね」とは記述が異なる。また、「ぜにっこ」は「カ」では「ぜね」となっている。「かんのんさま」に関しては、「浮」「片」に記述があるので下線を施さなかったが、「くわ」という拗音が「か」の直音になった「かんのんさま」は、他の片言資料にはない「カ」との共通の片言の語である。「カ」と「須」のみに共通する語をみると、連母音の音訛、促音の挿入、拗音の直音化が特徴的であり、これらが江戸特有の片言ではないかと考えられる。

## 6. 「かまど詞大概」に見る片言とは

以上、「かまど詞大概」と江戸時代の片言資料七種、さらに『東京須覧具』との比較を試みた。最後にこれらの語の比較を、表1 (P.190～191) に示しておく。

本調査により、「かまど詞大概」の語彙の中には、調査した七種の片言資料と共通の語が含まれていることがわかった。但し、その中には同じ発音の片言と、発音の一部が異なる片言が見られる。さらに『東京須覧具』との比較から、東京の俗語と共通する語が示された。これらの語は、江戸という地域の、特有の音訛から生まれた片言と考えられる。

三馬は『四十八癖』の中で、「<sup>たいとくわい</sup>大都會は、<sup>しよこく</sup>諸国の人<sup>あつま</sup>會るゆゑに、<sup>よしう</sup>六十余州の<sup>ほうげんつう</sup>方言通ぜずといふことなく、<sup>み</sup>耳に<sup>な</sup>馴れ、<sup>くち</sup>口に<sup>したか</sup>従つて、<sup>つね</sup>常に<sup>く</sup>諸州の<sup>ことば</sup>言語を<sup>かひ</sup>混ず。」と述べているが、「かまど詞大概」に見る片言の語彙には、江戸特有の片言と、他地域にも共通する片言が見られる。これは、当時の江戸の町が、様々な地域の人の流入により、諸地域の言語が混在する場であったとする『四十八癖』の記述に通じるものである。その意味で「かまど詞大概」は、『四十八癖』に記された江戸の町の言語事情を、実証的に示す資料ということになる。

今回は「かまど詞大概」の片言語彙を他の片言資料と比較したが、実際に「かまど詞大概」の語彙は、江戸の町でどのように使用されているのであろうか。この点に関しては拙稿(2012)で調査を行っているので、そちらに譲ることとする。

表1 「かまど詞大概」の片言と他資料の片言の記述

	かまど詞大概	他資料の片言部分の記述	東京須覧具
1	天はてんぢよく		てんぢよく
2	地はぢびた		ぢびた
3	南天はなるてん	なつてん「諸」「浮」「男片」「片教」	
4	古文字は唐様		
5	魂はたませへ		
6	紅粉はべね		べーべ（小児）
7	薦はとんび	とんび「諸」「浮」「片」「片教」「世片」	
8	着物はきりもの	きりもの「浮」「片」「世片」	
9	珊瑚珠はさんごじ		
10	寿老人はじろうじん		
11	しゅろ 箒はしろぼうき	しよろ「片」	
12	手裏剣はしりけん	しりけん「片」「片教」「七片」「世片」	
13	くはんおんは かんのん	※観音もくはんのんと唱がよし「浮」 ※観音堂くはんのど「片」	かんのんさま
14	火吹きだけを へいふき竹		
15	とうだいもとくらしを 東西もとくらし		
16	うんでいばんり 雲泥万里を うんでんぱんてん	うんでん万里「男片」 うんでんぱんり「七片」うんでんぱんり「世片」	
17	おち 落ることを おつこちる		おっこちる
18	かぞへ 算ることを かんぜへる		
19	せつた 雪駄をせきだ	せきだ「片」「世片」	
20	さみせんをしやむせん	しやみせん「諸」「浮」「片教」	
21	きのふ 昨日をきんにやう	きによう「浮」 きんのう きによう「片」「世片」	
22	ゆんべ 夕をよんべ	よんべ「諸」「浮」「男片」「片教」	
23	はんしはんしを はんしよはんしよ		
24	じつしいつせう 十死一生をじひいつしよ		
25	ぜに 銭はぜね	ぜぬ（ね）か？「片教」	ぜにっこ
26	まよひ子はまいご	まへ子「片」「片教」「七片」「世片」	

「かまど詞大概」の語彙

27	ひしやくはししやく	しやく (ししやくか?) 「片教」	
28	<small>じしやく</small> 磁石はぎしやく		ぎしやく 磁石
29	<small>ひやく</small> 百はしやく		
30	でんがくは れんがく又おでん		おでん(名)こんにやくノ煮込
31	<small>こていぬい</small> 御丁寧はごたいない		たいない 丁寧
32	<small>はいかい</small> 俳諧はへへけへ		へえけえ (名) 俳諧
33	<small>どうり</small> 草履はぜうり	じやうり 「片」「片教」「世片」	
34	あんどうは あんどん	あんどん 「諸」「男片」「七片」 ※「あんどう (あんど)」「浮」「片」	
35	<small>こう</small> 劫を経るは こうらをはいた		
36	<small>しあん</small> 思案はしやん		
37	<small>やまいぬ</small> 病犬は やまいぬ やめへぬ		
38	<small>てかう</small> 手の甲するは てのこつぼうする		
39	<small>よこほう</small> 横の方はよこぞつぼう		
40	ゐろりはゆるり	ゆるり 「諸」「浮」「片」「男片」 「片教」「七片」「世片」	
41	どもはどうもり		
42	<small>にちりんさま</small> 日蓮様は にちりんさま		
43	<small>わかしゆ</small> 若衆はわかし	わかしう 「諸」 わかし 「浮」	
44	<small>しばゐ</small> 芝居はしばや		しばや 芝居
45	<small>ちやまが</small> 茶釜はちやまが	ちやまが 「片教」	ちやまが 茶釜ノ倒訛
46	<small>おおかみ</small> 狼はおほかめ	おほかめ 「諸」「浮」「男片」「片教」「世片」	
47	<small>たぬき</small> 狸はたのき	たのき 「諸」「浮」「男片」「片教」「世片」	たのき 狸
48	<small>りりよりつ</small> 呂律わからぬは ろれつがまはらぬ	ろれつ 「男片」	
49	<small>わがいらく かま</small> 我家楽の釜だらひは わがゑいらくのかなだらひ		
50	<small>ふくろくじゆ</small> 福祿寿はほろくじん	ほろくじ 「片」	
51	<small>きば</small> 牙はきんば		
52	<small>えびす</small> 夷はゑべす	えべす 「片」「片教」「七片」「世片」	えべす 蛭子

※ 「かまど詞大概」では「おおかみたぬき 狼 狸はおほかめたのき」と記述されているが、便宜上二つに分けた。

注

- (1) 『浮世風呂』には、三編自序の「假字例」に、「○打遣置など、詰る言○ちやまが（茶釜 左ルビ）などいへる片言（かたこと）の屬は俗語に據る所也雅俗の異同は傍訓に従ひて會得あるべし」と、「片言」についての説明がなされている。「俗語」とは、ここではいわゆる日常に通用する話しことばと考えられる。本稿では、この記述を踏まえ、三馬の使用する「片言」を「日常の話しことばに見られる語形、発音、言いまわし、使い方などが不完全、不正確なことば」と定義する。
- (2) 白木・岡野（1979）では「元禄を迎えると重宝記と称する書が頻出し、多くは「片言なをし」を取り上げるが、それらには「かたこと」や浮世鏡第三の影響が大きい」とする。
- (3) 太平主人編『小野愚謔字尽』（1993）に紹介されている「大万宝節用集字海大成」は図の下に元文5年とある。
- (4) 本資料は表紙、内題とも「萬寶節用字海大成」（但し表紙は「宝」の字）、柱題に「大萬寶字林大成」とある。これは、佐藤貴裕（2009）『近世節用集刊行年表』『書物・出版と社会変容 6』に掲載されている「大萬寶節用集字海大成」と同類のものと考えられる。佐藤（2009）によると「大萬寶節用集字海大成」は、元文3年（1738）、元文5年（1740）の他、文化11年（1814）にも刊行されている。
- (5) 『節用集大系』第35巻（1998）によると『女節用集文字囊』は、『女節用集罌粟囊家宝大成』（寛保3年 1743）の増補改訂版とされる。『女節用集罌粟囊家宝大成』にも「諸人片言なをし」が見られ、その内容は全く同じである。
- (6) 「仕丁（じちよう）」（『萬寶字海大成（大萬寶字林大成）』）、「仕丁（しちよう）」（『女節用集文字囊』）のような濁点の有無の相違は見られる
- (7) 『往来物大系』『語彙科往来』（第13巻～20巻）、『重宝記資料集成』（第10巻～13巻）、『節用集大系』（全100巻）の調査による。
- (8) 土屋信一（2009）の「式亭三馬の江戸語観」で紹介された影印（p.93～96）を使用した。
- (9) 『日葡辞書』（1603～04）には「Vocame ヲウカメ（狼） 狼.」、また『天草版伊曾保物語』（1593）にも「Vocame」とあり、「狼」の発音は、片言の方が使用されている。当時の「狼」の日常的な発音を考える上で興味深い。
- (10) この異同に関しては、坂梨隆三（1977）で詳細な研究がなされているので、本稿では取り上げない。
- (11) 注5にあげた『重宝記資料集成』、『節用集大系』、『往来物大系』を参考にした。
- (12) 白木・岡野（1979）では『男重宝記』の「片言なをし」『世話重宝記』の「世話のかた言」と安原貞室の『かたこと』、『浮世鏡』との比較を行い、両資料が『かたこと』『浮世鏡』の影響を強く受けている点を述べている。
- (13) 『男重宝記』は長友千代治校註『元禄若者心得集 女重宝記・男重宝記』（1993）の活字版を使用した。『重宝記資料集成 第十一巻「教養・教習2』』（2006）所収の『新板増補男重宝記』（元禄15年版）の影印も参考にした。『参入世話重宝記』は『重宝記資料集成 第十一巻「教養・教習2』』（2006）所収の影印を使用した。『七ツいろは』は『往来物大系 第13巻』（1993）の影印、『文章指南重宝記』は『重宝記資料集成 第七巻「往来物2』』（2005）所収の影印を用いた。



参考文献

- 木村晟, 2008, 『江戸期女性語辞典Ⅱ 『女節用集文字袋影印と索引』』 港の人  
坂梨隆三, 1977, 「アンドンとアンドウ」, 『近代語研究』, 第5集, 武蔵野書院  
白木進・岡野信子, 1979, 『「かたこと」考』, 笠間書院  
鈴木真喜男, 1974, 「小野愚讒字尽 注記」, 『日本庶民文化史料集成 第九巻 遊び』, 三一書房  
田鍋桂子, 2002, 「国立国会図書館蔵『東京須覧具』について」, 『日本語論叢』, 第3号, 日本語論叢の会  
土屋信一, 1982, 「式亭三馬の江戸語観」, 『国語学』, 131, (『江戸・東京語研究—共通語への道』(2009)  
勉誠出版所収)  
土屋信一, 2009, 『江戸・東京語研究—共通語への道』, 勉誠出版  
長崎靖子, 2012, 「式亭三馬の片言描写—「かまど詞大概」を資料として—」, 『近代語研究』, 16集, 武蔵  
野書院  
長友千代治, 2005, 『重宝記の調方記』, 臨川書店